

第4部会

「教育力の開発部会」では、今年度は4回の部会委員会を持った。幼、小、中、高、大学とそれぞれのグレードからさまざまな教育力についての考え方、イメージの仕方が出されたが、おおよそ次の内容に集約され、10月23日を迎えることになった。

人生の目的、学習の目標を見出せず、学習への取り組みに意欲を持ってない学生、生徒がいる。そのような学生、生徒に学習意欲を持たせる動機付けとなるものにどのようなことが考えられるか。

法人内の他の学校のために、園児、児童、生徒、学生が相互に協力し合えることはないか。

私立学校として今後の発展向上のために、教員全体として指導力強化が必要であり、そのための有効な方法はないか。

今回は特に を中心に部会の中での体験を含め討議をすることになった。

1. セッション I で討議された内容

政治経済学部における学習意欲向上の試み

発表者 聖学院大学政治経済学部 標 宣男教授

発表内容

学習意欲の希薄な学生に学習の動機付けとして、自分の学んでいる学問と社会との関係を具体的に知る 場 すなわち具体的な現場体験を講義の中に位置付けた試みとして、「学社融合ワークショップ」(鴨川調査)と「インターンシップ制度」がある。

鴨川調査

関連する講義は「環境政策論」「地域社会論」「NPO・NGO論」などで、それぞれ鴨川美化のワークショップへの参加によって講義内容が自分の問題として体験的に捉えられる良い機会となった。 準備として講演会「鴨川を美しくする」に参加学生も含め聞き、6月に鴨川の調査を行った。調査項目は「景観、流量、水質、水中の生物、水辺の生物など」で、5グループに分かれ上流から下流に向けて行った。調査結果のまとめと発表は二回に分けて行われた。

参加した学生がこの調査から学んだことは「環境調査の方法」「環境を守るために住民の協力、ボランティア活動の必要性」「水源がない鴨川をきれいにする抜本的対策の必要性」「水利権や資金調達の問題」「これらを解決するためには上尾市全体の都市計画の中で考えねばならないこと」などであった。これらのことからみて、このワークショップへの参加が、学問を学ぶ動機や意味を再発見し、学習意欲の向上の良い機会となりえた。

インターンシップ制度導入

最近の学生は職業についてあまり執着を持っていないことから、学生に社会に出て行く前に明確な職業観と職業意識をもたせ、社会人としての基本的な態度を身につけさせることを目的としている。「インターンシップ」を学科目として単位化し、外部講師による講義や、現場実習を行いレポートを提出させた。この試みも学生に大学での学びの意味を再発見させる良い機会となった。

2. セッションⅡで討議された内容

セッション には「鴨川調査」の学生発表者佐藤浩之君と「ネイチャートリップ」の生徒発表者斎藤慶一君、田波宏君にも参加してもらった。

学習意欲を高める試み 「ネイチャートリップ」

発表者 聖学院中学高等学校 相澤睦教諭

発表内容

「ネイチャートリップ」は環境教育の一環として始められ、その目標は感性を呼び覚まし、知性を刺激し、それらを動機付けとして行動に移すことにある。「ネイチャートリップ」には「ネイチャーゲーム」(感性)と「調査研究活動」(知性)の2本柱がある。実施に当っては、指導者は教えすぎないこと(気づきや発見を大切に)、分かち合いを効果的にすること、チャンスを逃がさないことなどが大切である。

「ネイチャーゲーム」については五感をフルに使って、特に視覚以外の感覚を使って自然を感じさせる。相澤先生に「ネイチャーゲーム」について説明していただいた後、外に出て、全員でネイチャーゲームを体験した。「コウモリとガ」というゲームで、食物連鎖の一部である食うもの(コウモリ)と食われるもの(ガ)をゲームで理解するものである。参加者全員真剣にガになったりコウモリになったりして、体験を通して「ネイチャーゲーム」を理解し、楽しんだ。その後、学生及び生徒の発表者に対して、教師側の意図したことが学生、生徒にとってどうであったか質疑応答が行われた。

3. 今後の課題、継続討議について

第1回、第2回の教育会議においてこの部会では、生徒の学習意欲を高めるための工夫として主として「体験学習」的な内容の実施報告を行ってきた。各校の取り組みがよく分かり、自校でも今後の参考になるものであった。教育会議最後の年になる次年度は、私学を取り巻く厳しい状況の中で、聖学院教職員全体の教育力の向上を目指し、それぞれどのように努力し、協力できるか協議してみたい。

(報告者：大野 碧)